九州天皇家論
3章　神武東征

九州天皇家の誕生

第一次神武東征

東征路

＜古事記が示す東征ルート＞

(1) 日向－豊国・宇佐－ 筑紫岡田宮（1年）－阿岐国多祁理宮(7年)－吉備高島宮（8年）
(2) 吉備國－速吸門－浪速の渡り－青雲白肩津（会戦）－南方－血沼の海－紀国・男之水門（五瀬命没）－熊野村－吉野川河尻－宇陀穿－宇陀－忍坂大室・・・・・・・・畝火の白梼原宮

＜日本書紀が示す東征ルート＞

(1) 日向國－速吸之門－筑紫・菟狭－筑紫・岡水門－安芸國－吉備國
(2) 吉備國－難波崎・浪速國－河内國・草香邑・青雲白肩津－孔舎衛坂会戦－草香津（盾津）－茅渟の山城水門－名草邑－熊野・神邑－熊野・荒坂津－菟田・穿邑－吉野・・・・・・・・・畝傍山

神武第一次東征は政治目的

神武東征ルートについては従来の読みを根本的にかえなければならない。東征は二つに別けて行われたと読むべきである。最初の行路は日向高千穂宮－豊国宇沙－筑紫岡田宮（1年）－阿岐国多祁理宮(7年)－吉備高島宮（8年）である。この行路には戦闘はない。各国の宮に平和に滞在している。その目的を神武は次のように語っている。

> 神倭伊波礼毘古命、其の伊兄五瀬命と二柱、高千穂宮に坐して議りて云りたまひけらく「何地に坐さば、平らけく天の下の政を聞こし看さむ。猶東に行かむ」とのりたまひて、即ち日向より発たして筑紫に幸行でましき。（「古事記・中巻」）

神武の念頭にあったのは「天の下」の統治、つまり、「大八洲」の統治である。これらの国々の統治をいかにするか。その首都をどこに置くか。これが神武の懸案であった。そのために東の諸国の宮を歴訪したのである。

スタート「日向」は小倉北区

神武は先祖伝来の「日向高千穂宮」から出発した。この宮は小倉北区にある。ここから向かったのが「豊国宇沙」である。

古事記の「豊國宇沙」と日本書紀の「筑紫菟狭」

古事記では、神武は「日向」から「豊國・宇沙」に向かった。

> 故、豊國の宇沙に到りましし時、其の土人、名は宇沙都比古、宇沙都比売の二人、足一騰宮を作りて、大御饗献りき。（「古事記・中巻」）

現在、「宇佐町」の地名が小倉区北区にある。「小倉北区宇佐町」は「神嶽川」の川辺に位置する。故、「小倉北区・宇佐」は古来は港町であったと想像できる。古事記の神武が訪ねた「土人」の名前は「宇沙都」である。「都」は「つ」と訓む。つまり、港である。従って、「小倉北区宇佐」が古事記の「豊國・宇沙」と同じ港町と想定することができるかもしれない。しかし、「小倉北区宇佐町」は、云うならば、「日向の宇沙」である。だが、古事記は「日向の宇沙」と記さずに、「豊國の宇沙」と記している。神武が最初に行った「宇沙」は「豊國」にある「宇沙」ということである。小倉北区は「日向（西）」である。「豊國」とは小倉北区ではない。

では、この「豊國」とはどこに存在したのか。古代、「豊國」は二つ存在した。國生み神話に登場する「豊國」は「伊豫二名嶋の豊國」と「筑紫嶋の豊國」である。神武が、まず訪れた「豊國の宇佐」とは「伊豫二名島の豊國」か、それとも、「筑紫の豊國」か。「伊豫二名島」とは「彦島老町」である。神武の居た「高千穂宮」から見れば、真北に当たる。「筑紫」とは「門司港」である。神武の「高千穂宮」から見れば、正確には東北である。神武は、「何地に坐さば、平らけく天の下の政を聞こし看さむ。猶東に行かむ」と、語っている。方角は東である。東と東北は同じではない。だが、二つの「豊國」のうち、どちらが妥当かと云えば、東北の「豊國」であろう。神武が最初に訪れた「豊國」は「筑紫の豊國」である。神武が訪問した「筑紫豊國」とは門司港である。成功を祈って、「大御饗」が「豊國（門司港）の宇沙」で行われた。これが神武東征の最初の出来事である。

日本書紀は異なる表記をしている。

> 行きて筑紫國の菟狭に至ります。時に菟狭國造の祖有り。号して菟狭津彦・菟狭津媛と曰ふ。乃ち菟狭の川上にして、一柱騰宮を造りて饗奉る（「日本書紀・神武紀」）

日本書紀では、「筑紫國の菟狭」となっている。日本書紀の表記は明快である。「筑紫國」は一つしかない。「豊國」は二つある。どちらの「豊國」か。その考察が必要となるが、「筑紫國」は一つで、どちらかという考察は不要である。日本書紀は、その記述箇所に、小さな割注で、「ウサは地の名なり。此をば宇佐と云ふ」と説明してい

る。日本書紀では「筑紫・菟狭」となっているが、この「筑紫」は「國生み・筑紫國」で、門司港である。古事記「豊國・宇佐」と日本書紀「筑紫・菟狭」は、ほぼ同じ場所で、現代で云えば「門司港」である。

日本書紀は「筑紫・菟狭」、古事記は「豊國・宇沙」と表記は異なるが、この二つの国はいずれも國生みの「筑紫嶋」に存在した古代国である。「筑紫嶋」には四つの国があり、そのうち二つを「豊國」「筑紫國」と云った。どちらも門司港の周辺に存在した弥生集落である。古事記も日本書紀もほぼ同じ場所、門司港周辺で神武歓迎の宴が行われたと記しているのである。

筑紫・岡田宮は門司港

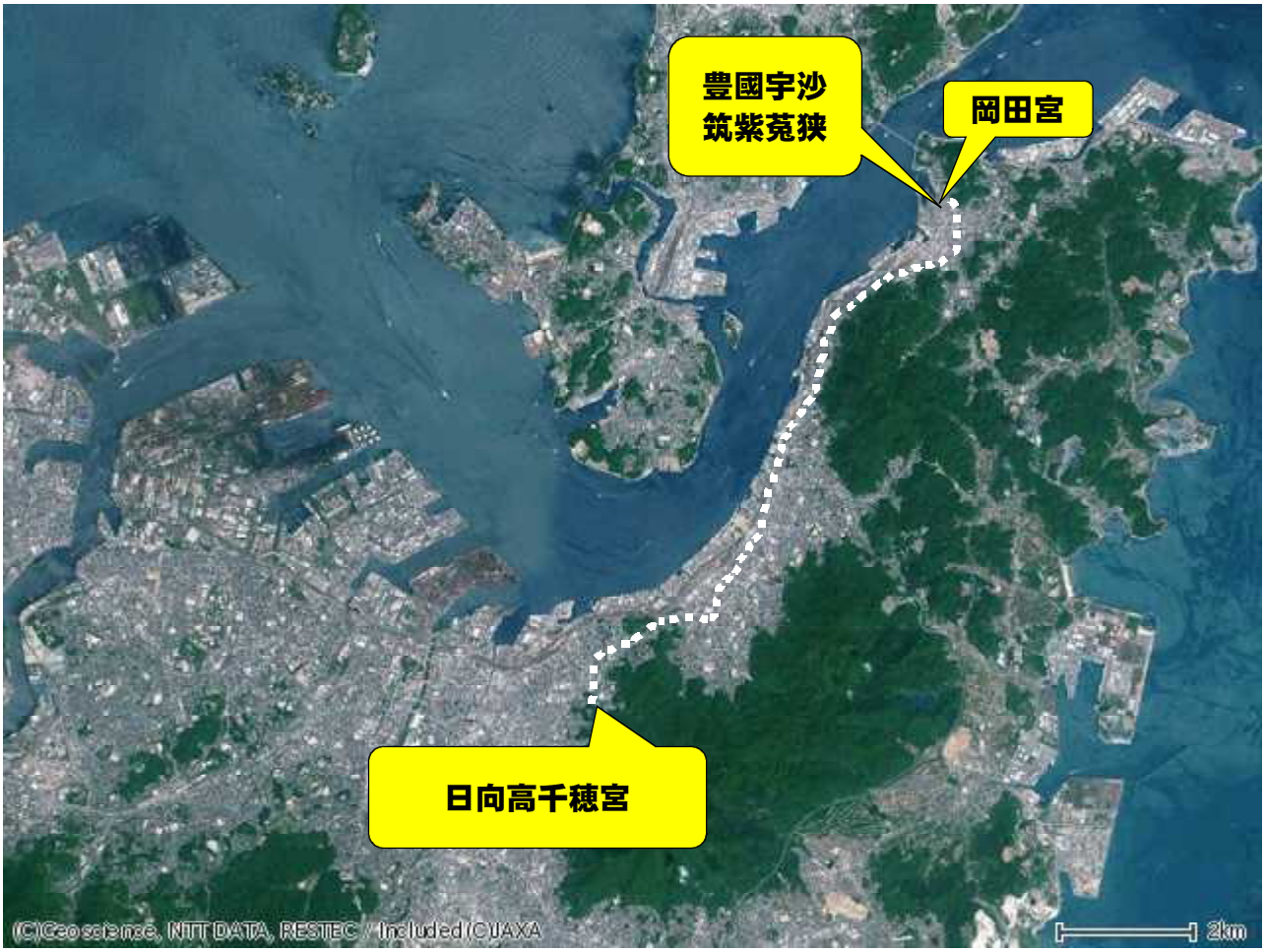
神武東征における「筑紫」とは國生み神話に登場する「筑紫島の筑紫國」である。この「筑紫」は九州全体をさすのでもなければ、また、福岡県をいうのでもない。神武東征における「筑紫」とは「門司港」である。

「筑紫」の名前の由来は、瓊瓊杵尊説話にある。瓊瓊杵尊はその地に降臨して以来、その地の開発に「尽くし」た。故に、その土地が、「ツクシ」と呼ばれるようになったという訳である。瓊瓊杵尊が降臨した土地は小倉北区。彼が、開発に生涯を捧げた土地とは筑紫（門司区）であった。

門司港は下関と北九州を結ぶ要所である。いずれの時代も栄えるのは交通の要所である。人も物も冨も行き交う。「天（あま）王朝」は関門海峡の要所である門司港に宮を構えていた。神武が一年滞在した「岡田宮」はこの豊かな國に存在した「天（あま）王朝」の宮であった。

「岡の水門」も門司港

日本書紀は「筑紫の岡水門」と書いている。古事記では「筑紫の岡田宮」である。この二つの記録に特に矛盾はない。どちらもほぼ同じ場所である。筑紫の「岡水門」は港を意味する。門司港である。



阿岐國・多祁理宮は「秋津嶋」

古事記神武東征のこれまでのルートは陸路である。特に船を使用したという記録はない。従来、「日向」を出た神武は舟で東征したと考えられてきた。「日向」を宮崎県日向に比定すれば、当然、東征は航路となる。交通手段は舟である。ところが、神武が出発した「日向」とは宮崎県日向ではない。小倉北区である。神武はここから出立した。その目的地は「筑紫」である。「筑紫」とは門司港である。この行路は徒歩でも舟でもどちらでも可能である。特に船に乗ったという記述はないので、おそらく、陸路をとったのではないかと思われる。神武の最初の行路は陸路だったと考えるべきあろう。そしてここまでの旅路は「東征」という意味を持たない。すべて「國生み」で生まれたの國を訪問しているだけである。これらの國は、いわば、「天(あま)王朝」の支配下の国々である。滞在目的は「何地に坐さば、平らけく天の下の政を聞こし看さむ。」という神武の言葉に表れている。これは政治である。

「筑紫國」の次の滞在地は「阿岐國」である。「阿岐國」とはどこか。この國の特定が神武東征の行路を決定する。七年も滞在した「阿岐國」は東征において最も重要な位置をもつ。この國の存在を抜きにしては東征は考えられない國である。。

「阿岐國」もまた「國生み」に登場する國である。神武東征のロードマップは「國生み」「天孫降臨」と深く繋がっている。「阿岐國」とは「國生みの秋津嶋」である。「國生み・秋津嶋」とは門司大積である。

神武滞在は港町

神武が「日向高千穂宮」から東行した経路は、豊国宇沙－筑紫岡田宮(1年)－阿岐國多祁理宮(7年)である。この行程の目的は政治である。「筑紫」とは門司港である。門司港は北九州の玄関口である。神武の昔から下関と北九州をつなぐ海上交通の要所であった。人と物が行き交いここには富が集中したことであろう。

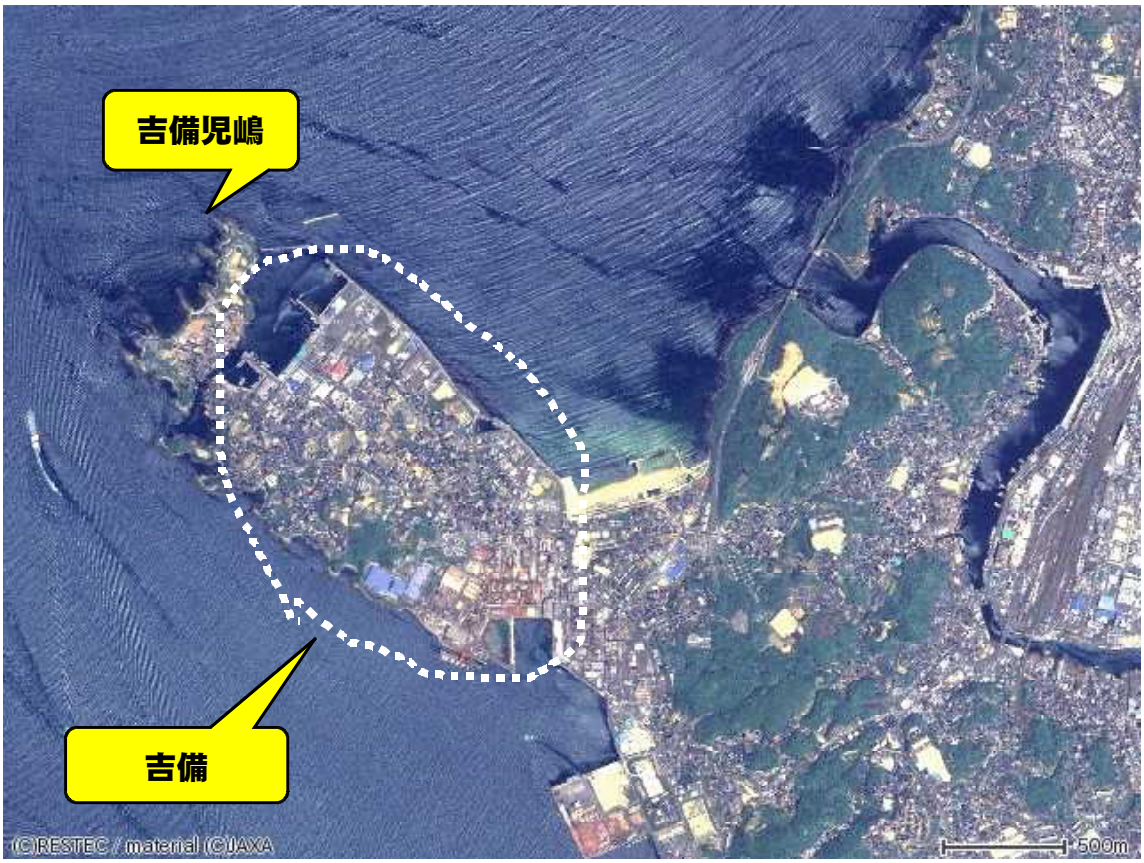
次に滞在した宮が「阿岐國」の「多祁理宮」である。「阿岐國」とは「門司大積」である。ここは現在の政治経済

から見れば辺鄙な所である。神武がわざわざ出かけて七年も滞在するような場所とは思えないかもしれない。しかし、それは近代の海上交通が発達した時代における評価である。「大積み」はその名の通り、近世までは関門海峡の難波を避けて多くの舟が出入りし、荷物を大いに積み込んだ港町だったのである。ゆえに、「大積」と呼ばれたのである。ここにも船が集い、人が集い、富が集中した。神武がここに七年滞在したのは「阿岐國（大積）」が政治的経済的に重要な土地だったからである。では、次に神武が向かった「吉備」とはどこか。

「吉備」とはどこか

然ありて後、還り座す時、吉備児島を生みき。亦の名は建日方別と謂ふ。次に小豆島を生みき。亦の名は大野手比売と謂ふ。次に大島を生みき。亦の名は大多麻と謂ふ。次に女島を生みき。亦の名は天一根と謂ふ。次に知訶島を生みき。亦の名は天之忍男と謂ふ。次に両児島を生みき。亦の名は天両屋と謂ふ。　（國生み・吉備児島）

イザナギ・イザナミは「大倭豊秋津島」建国から帰る途中に「吉備児島」を生んだ。伊邪那岐命夫婦は関門海峡を東から西に戻ってきたのである。そして、最初に「吉備児島」生んだ。別名は「建日方別」である。次に「小豆島」を生んだ。「小豆島」は「あずき」の形をした島で、下関市の「六連島（むつれじま）」である。「吉備児島」の場所は彦島と「小豆島（六連島）」の間である。その間にある島は「彦島・竹の子島」である。ここが「天（あま）王朝」の「吉備児島」である。その本国の「吉備」とは西山町である。



応神天皇の歌“吉備なる妹を”の小豆島・吉備

古代日本史を解明する上で、「吉備」は重要な意義をもつ。「吉備」は神武の東征行路においても重要な國である。「吉備」といえば、通常、岡山吉備と考えられている。だが、「天（あま）王朝」における「吉備」とは岡山吉備ではない。「吉備」は日本書紀・応神紀にも登場する。

22年の春3月5日、天皇、難波に幸して、大隅宮に居します。・・・爰（ここ）に天皇、兄媛が温情之情篤

きことを愛でて、則ち謂りて曰はく、「爾二親を視ずして、既に多に年を経たり。還りて定省（とぶら）はむと欲（おも）ふこと理灼然（ことわりいやちこ）なり」とのたまふ。則ち聽（ゆる）したまふ。仍（よ）りて淡路の御原の海八十人を喚して水手（かこ）として、吉備に送す。
夏四月に、兄媛、大津より發船して往りぬ。天皇、高臺（たかどの）に居しまして、兄媛が船を望（みそこなは）して、歌（うたよみして曰はく、

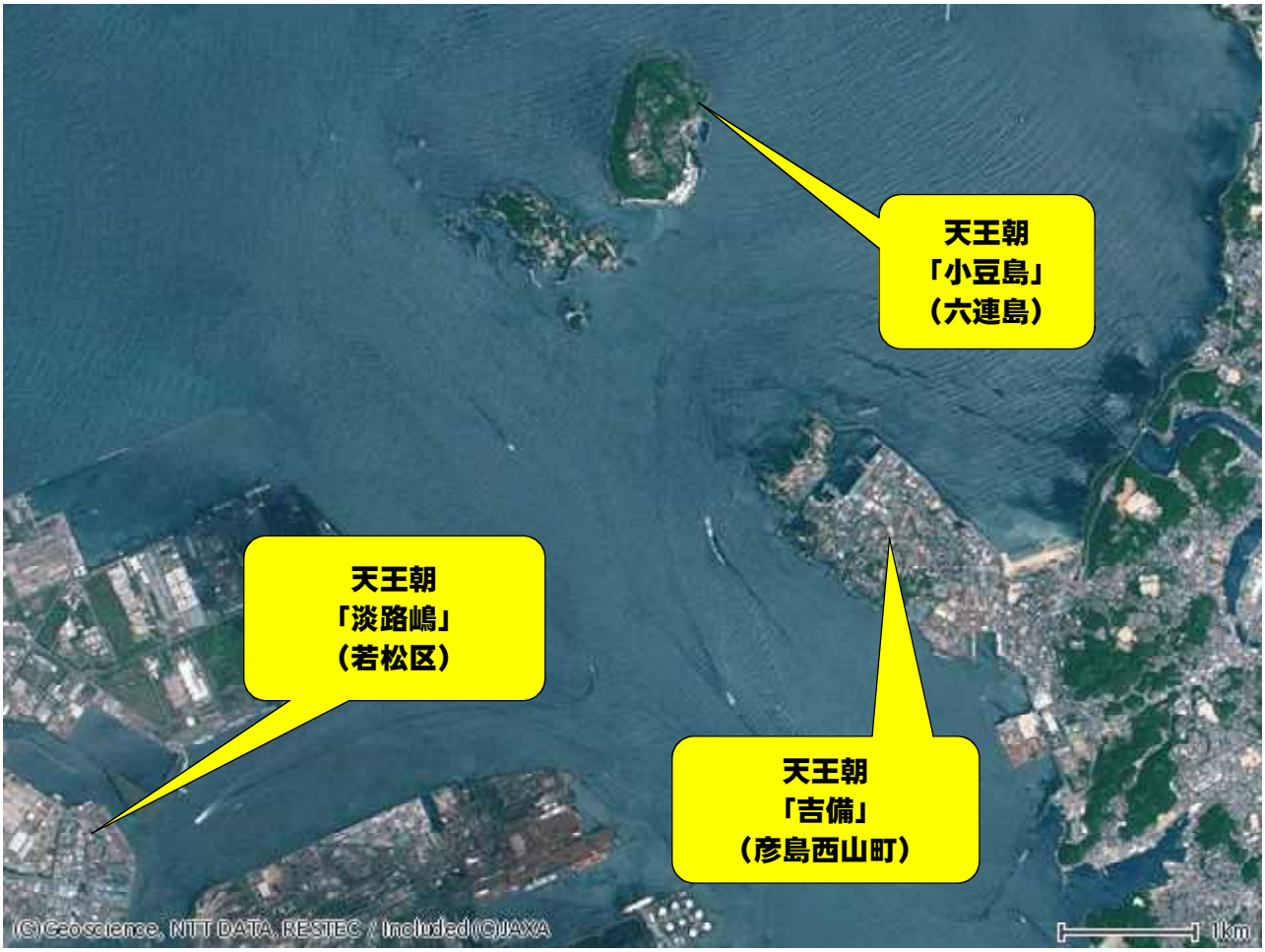
淡路島　いや　二並び　小豆島　いや　二並び　寄ろしき嶋嶋　誰かた去れ放ちし
吉備なる妹を　相見つるもの

秋9月6日、天皇淡路島に狩したまふ。是の嶋は海に横（よこたは）りて、難波の西に在り。峯巌（たけいはほ）紛（まよ）ひ錯（まじ）りて、陸（おか）谷相続けり。芳草薈（しげ）く蔚（も）くして、長瀾（たかきなみ）潺（そそ）ぎ湲（なが）る。亦麋鹿（おほしか）・鴨・雁、多に其の嶋に在り。故、乗輿、屢（しばしば）遊びたまふ。天皇、便ち淡路より転りて、吉備に幸して、小豆島に遊びたまふ。

「淡路」「吉備」「小豆島」がセットで登場している。「天皇、便ち淡路より転りて、吉備に幸して、小豆島に遊びたまふ」と記述するように、応神は9月６日に「淡路」から「吉備」へそして「小豆島」と渡っている。現代の「淡路嶋」「岡山吉備」「小豆島」では一日で渡るという訳にはいかない。これらの島は「天（あま）王朝」の「淡路島」「吉備」「小豆島」である。この三つの島は全て関門海峡に存在した。「淡路島」とは若松区、「吉備」とは彦島西山町、そして「小豆島」とは六連島である。

「難波」とは関門海峡の海である。「大津」とは小倉北区の港である。その港から出て行く「兄媛」の船を見て歌を詠んだ。そこから「淡路島（若松区）」「吉備（彦島）」が見える。

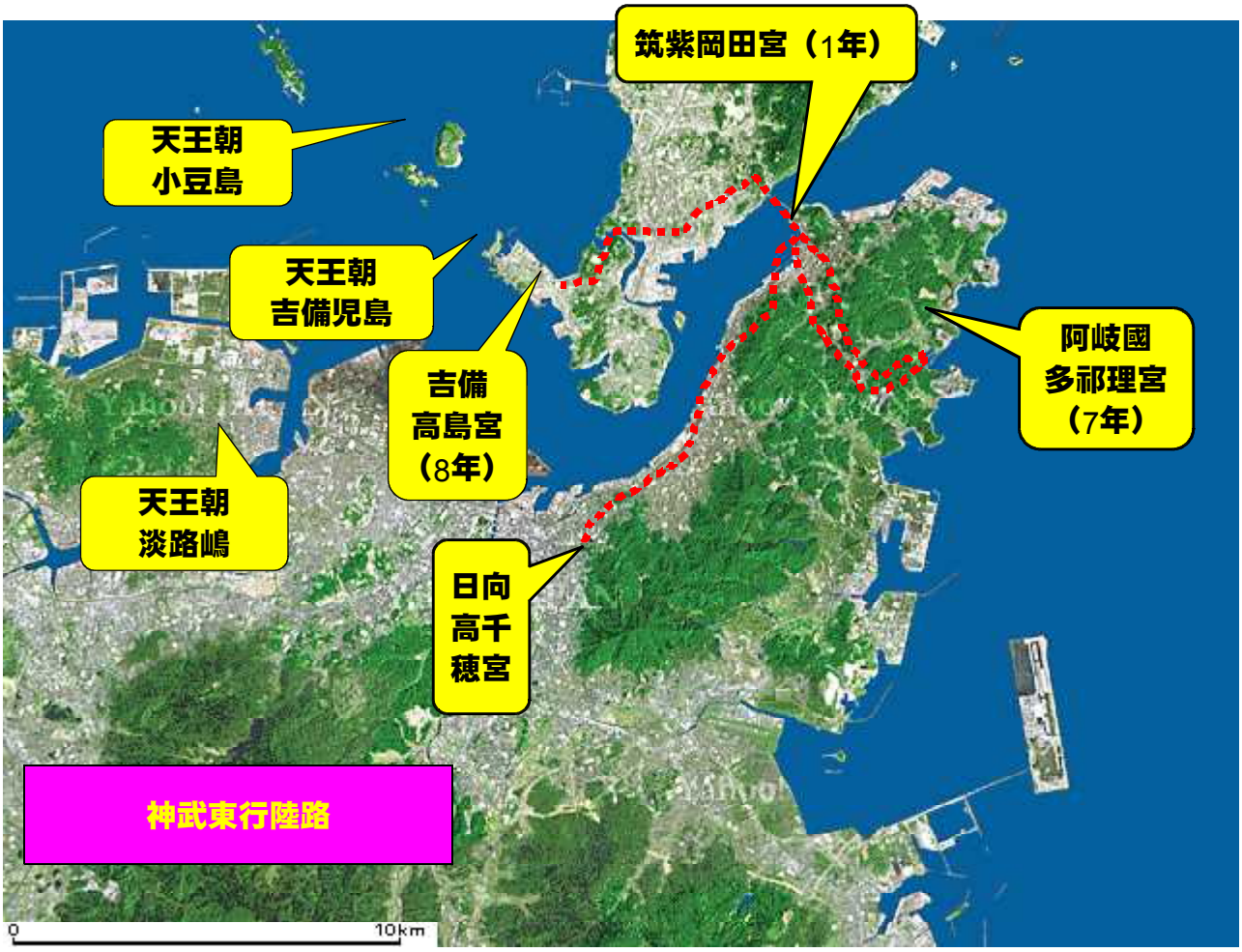
「二並び小豆島」と詠んだように、「天王朝」の「小豆島」はふたつ並んだ島である。「小豆島」はその名の如く「小豆（あずき）」の形をしている。現在の「小豆島」は「あずき」というより「だいず」である。「天王朝」の「小豆島」は「あずき」の形で、二つの島がある。「小豆島」とは「六連島」である。この島の形はまさしく「あずき」である。



「天(あま)王朝の「吉備」は西山町

天王朝における「吉備」とは彦島西山町である。何故、ここが「吉備」という地名となったのか。「小豆島」はまさしく、「あずき」の地形である。古代の人々が島の形から名前をつけている例は多い。「吉備」も恐らくそうであろう。「吉備」とは穀物の「きび」であろう。きびの実が垂れ下がった形は彦島、西山町の地形と似ている。古代は、西山町はもっと海が入り組んでいたと思われる。そうするとまるで「きび」の実った姿ではないか。

第一次神武東征陸路



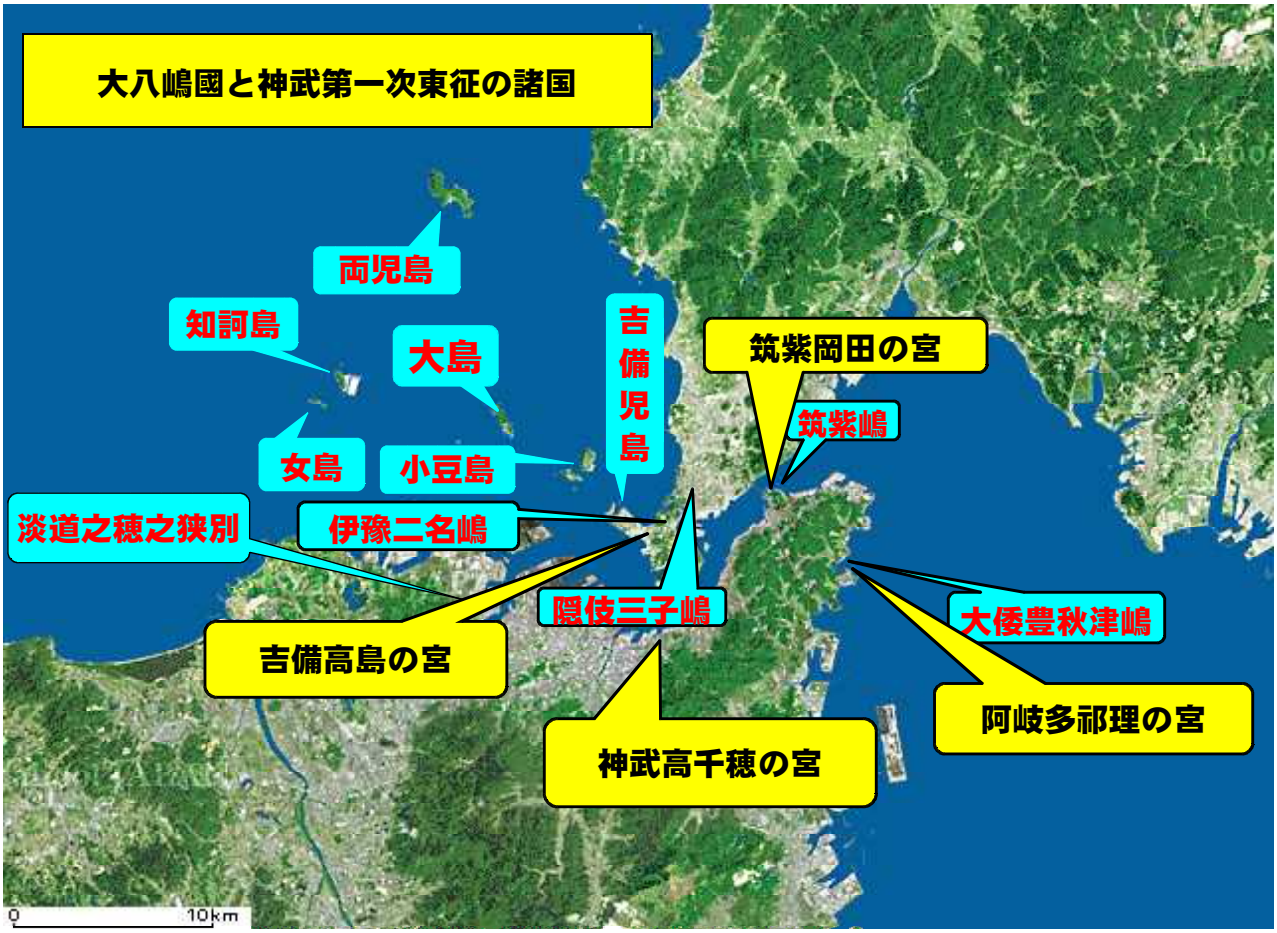
神武行路は「大八洲」の国々

神武が滞在した国はイザナギの国生みを踏襲している。国生みの「筑紫嶋」は門司の古城山である。ここには神武が一年居た「筑紫・岡田宮」があった。また国生みの「大倭豊秋津嶋」とは門司大積である。ここには神武が七年いた「阿岐國・多祁理宮」があった。その宮とは、現在、「水天宮」と云われるお宮だったのではなかろうか。イザナギの軌跡と神武の軌跡は一致している。これは当然であろう。神武の当初の旅立ちの目的は「天の下」の統治であった。神武にとって「天の下」とは「大八洲」のことである。「国生み」の各国と神武が滞在した国々とは一致しなければならない。

これらの国はいずれも港町で、その地方の政治・経済の中心地だった。そして神武は「阿岐國」から「吉備」に渡った。この軌跡もイザナギの国生みコースと同じである。イザナギは「豊秋津嶋」を国生みしてからユーターンして六つの嶋を生んだ。「吉備児島」「小豆島」「女島」「大島」「知訶島」「両児島」である。

「吉備」滞在の目的

神武が「阿岐國」から「吉備」に渡った軌跡はイザナギと同じある。だが、その目的は異なる。神武は「阿岐國」から「吉備」に渡ったのは軍事が目的だった。神武は「吉備の高島宮」に八年いた。二倍歴と考えて四年である。ここで「舟」「武器」を準備した。造船は「吉備」で初めて可能だったのである。神武はこの「吉備」滞在で「東征」の為の軍備を整えたのである。

では、神武が軍事による東征を決断したのはいつか。それはどこか。「阿岐國」である。神武は「筑紫（門司）」から「阿岐（大積）」まで進み、そこで軍事東征を決意したのである。その為には兵が必要である。兵を運ぶ船が必要である。武器が必要である。食糧も必要である。それらの必需品は「阿岐國」にはない。特に船を造る技術は神武が滞在した國にはない。造船技術を持っている國はどこか。「吉備」だ。こうして神武は「阿岐國」から関門海峡を渡り、彦島「吉備」の仮の宮に住んだのである。

神武には軍事的に侵攻する目的地が見えていた。「阿岐國（大積）」には、人や物だけでなく、情報も集まっていた。ここから、私たちがよく知る「東征（侵略）」が始まる。ここまでは軍事ではなく平和な旅だったのである。